MOMAT

新版画 速水御舟



描くたびに、新しい。

2027 3/19(金) - 5/9(日)

Hayami Gyoshu: A Nihonga Innovator

東京国立近代美術館
The National Museum of Modern Art, Tokyo

《京の舞妓》1920年 東京国立博物館蔵 Image: TNM Image Archives



《白日夢》(部分)
1934年
敦井美術館蔵

斬新な速水御舟の画業を、斬新に読み直す！

速水御舟(1894-1935)は、大正から昭和初期にかけて活躍した日本画家です。畳の目をひとつひとつ描くような細密描写や、前衛にふみこんだ構成などにより、日本画を「斬新」に革新しました。

東京国立近代美術館では、5年ほど前より御舟が残した貴重な資料類(日記、書簡、古今東西の美術や解剖学の資料等)をお預かりし、分類・調査を続けてきました。日記や書簡の一部など、すでに翻刻を終え公開したものもあります。御舟の画業を知るうえで、これらの資料がたいへん貴重なものであることは言うまでもありません。

この分類・調査を契機として、当館と毎日新聞社、日本経済新聞社は、御舟の回顧展を開催いたします。**70年を超える当館の歴史のなかで御舟展は初めてのことであり、国立美術館としても、1980年に京都国立近代美術館で開催して以来、実に47年ぶりのこととなります。**

出品作品は、東京と京都の国立近代美術館が所蔵する作品を軸に、全国の美術館、所蔵家の皆さまのご協力を得て、**御舟のことをもっと知るために欠かせない約100点を集めます。**これらをさまざまな資料とつきあわせながら**「斬新」に読み直してゆく展覧会**となります。

本展の特徴

1 速水御舟資料の整理が進んだことを契機に開催する、東京国立近代美術館では初めての回顧展です。

近年、国立美術館のコレクションに《渓泉二図》(1921年)[→12頁]、《京の家・奈良の家》(1927年、以上東京国立近代美術館蔵)[→14-15頁]、《埃及風俗図巻》(1931年、京都国立近代美術館蔵)などの重要作品が加わったことも、開催を後押しする力となりました。



《埃及風俗図巻》(部分)1931年　京都国立近代美術館蔵

2 御舟をもっと知るために欠かせない作品、約100点が全国から集まります。

初公開！
《小春日図》
3/19 ― 4/11
展示期間

回顧展では初公開となる作品や、数十年ぶりの出品となる作品も多数登場します。(※会期中、展示替えがあります。)

一例をご紹介

初公開

《小春日図》1929年　兵庫県立美術館(穎川コレクション)蔵(→右)

《山百合》1912年

《枯木鳩》1917年

《山鷸躅と蝦蟇》1925年

92年ぶり　遺作展(東京府美術館　1935年)以来

《芙蓉図》1932年

《浮華潜鱗》1933年

47年ぶり「速水御舟の芸術展」(京都国立近代美術館　1980年)以来

《牡丹睡猫》1926年　光ミュージアム蔵

《白日夢》1934年　敦井美術館蔵(→16頁)



《小春日図》1929年
兵庫県立美術館(穎川コレクション)蔵

3 作品を資料とつきあわせて初めて分かることの数々を披露します。

知らなければ「よい作品」でしかない作品の裏側を、資料とともに読み直してゆきます。資料そのものは厳選してご紹介。日記、書簡、研究会記録、御舟が座右においた古今東西の美術本や写真等々、ほとんどが未公開の興味をそそるものばかりです。

4 超絶の描写力を近くからご覧ください。

本展では、写実表現を紹介するコーナーを中心に奥行の浅いケースを用意して作品をご紹介します。ビクセンの単眼鏡の貸出もおこないます。御舟が20代のときに試みた写実表現には誰もが驚嘆するはずです。眼を凝らしてようやく針先ほどに細い線、針孔ほどに細かい点が見えてくる作品もあれば、単眼鏡でどんなに拡大してもすべすべ、つやつやにしか見えない果物や陶磁器の静物画もあります。人の手で、しかも日本画の絵具で、ここまで描いた100年前の超絶の描写力を、会場で存分にお楽しみください。



《赤絵の鉢にトマト》(部分)1921年



《菊花図》1921年

だから面白い。本展の楽しみ方

〝実在するものは美でもなく醜でもない、唯真実のみだ〟
(「私の行く道」『大毎美術』10巻10号　1931年10月)

今の人たちは速水御舟のことを「《炎舞》の画家」としか認識していないかもしれません。まことに残念なことです。御舟ほど、一点の作品で括れない画家はいないというのに。彼は何度もスタイルを変え、そのたびに面白い作品を生み出しました。
あるいは彼を日本画の巨匠だと誤解しているかもしれません。しかし、彼に知名度があるとしたらそれは日本画を拡張してやまないその斬新さゆえ。御舟が試みた克明な写実表現は日本画の常識を覆しましたし、ものを見ないで「真実」をあらわそうとする試みすら行いました。当時の批評家たちは彼のことを「異常な画家」、「エキセントリックな画家」と評していたのです。「エキセントリック」な御舟ですから、作品の小さな違和感を見逃してはいけません。そこには、御舟その人のなかで変化してゆく「真実」と、そのために仕組んだ虚構がきっと隠れているからです。御舟の残した資料の整理が進んだ今、その謎解きは始まったばかり。ひとつの資料から、作品や作家に対するイメージが変わることもあるかもしれません。



御舟をめぐることば

文化人

御舟先生にはお目にかかったことはございませんけれども、非常に洗練された線をお描きになるということで、大変に尊敬しております。…基礎的なものがちゃんとできて、筆の穂先までをよく使っていらっしゃらないと、こういう線は出てこないと思うんです。(「座談会　御舟を語る」『日本書法』9号、2006年12月)

閑万希子(書家)

速水御舟の描いた牡丹花は一輪だけで、静謐さが漂い心の奥深くに迫ってくるものがある。(「私の好きな日本画 三選 速水御舟 牡丹花(墨牡丹) 山種美術館蔵」『花の家に生まれて』文藝春秋企画出版部、2006年5月)

山根由美(華道家　真生流第三代家元)

日本画家

私は速水君が何十年何百年に一人と言つていゝ位、画家として傑れた人であると信ずる。(「畏友速水御舟君」『塔影』11巻5号、1935年5月)

小林古径(1883-1957　いちばんの盟友)

築いては壊し、築いては壊し、して行つた努力は到底尋常の人の成し能はざる所であつた。…岡倉先生は本当の画家はさうでなくてはならぬと言はれたが速水君は岡倉先生に教へを受けなかつたけれども、期せずして先生の教へを実践したわけであつた。(「若い人々へ」『美術評論』4巻3号、1935年4月)

横山大観(1868-1958　言わずと知れた巨匠)

全く、文字通り、速水さんの一生は研究の一生であつたと思ふ。(「研究の一生」『美術評論』4巻3号、1935年4月)

鏑木清方(1878-1972　優れた批評眼の持ち主)

コレクター

私は御舟を買い求めて来ては座右に置いて眺め尽した。…私は、芸術の深さ、力強さ、ゆるぎなさ、そうして妥協のなさを、こうして教えこまれて行った。(「そのすべてを御舟から得た」『季刊アート』98号、1982年春季)

武智鐵二(1912-1988　演出家・評論家)

この画を観ると、「白日夢」という題がぴったりする。真昼の夢幻を思わせる雰囲気をもっている…私は、この「白日夢」が、私のコレクション中、随一の作品と思っている。(「美の心」『春草 華岳 御舟展』敦井美術館、1984年)

敦井榮吉(1888-1984　実業家、敦井美術館を創立)



1931（昭和6）年《コモの街》制作中の御舟

速水御舟（1894-1935）

略歴

1894（明治27）年東京浅草に生まれる。本名は蒔田栄一（まきた・えいいち）。

——

1908（明治41）年松本楓湖（1840-1923）の安雅堂画塾に入門。塾頭の今村紫紅（1880-1916）を慕い、1911年紅児会に参加、1914（大正3）年赤曜会の結成に参加した。同年横山大観（1868-1958）らが再興した日本美術院展に出品して院友、1917年南画風を示した《洛外六題》（震災で焼失）により同人に推挙。

——

1920年克明な写実表現を試みた《京の舞妓》（東京国立博物館蔵）が批判を浴び、理想主義の日本画を目指した大観から除名されそうになったというエピソードも残る。写実表現を日本画になじませるため中国絵画や琳派等の古典絵画を参照し神秘感をまとわせた後は、前衛を意識しつつ平面構成による作画を試み、やがて視覚に頼っていては表現できない真実を描こうと線や色の表現力を探求した。その間、1930（昭和5）年ローマ日本美術展に随行してヨーロッパを巡遊、1933年朝鮮美術展覧会の審査にあわせ朝鮮を旅行した。

——

1935年腸チフスに罹り40歳で死去。次々とスタイルを転換させ、実験的な問題作をも生み出しながら日本画の変革を推進した画家のひとり。

展覧会の構成

章構成は色矢印のとおり。

1910年（16歳） 第10回巽画会展で初入選。

1914年（20歳） 赤曜会結成に参加。

1917年（23歳） 京都に移住。《洛外六題》で再興日本美術院同人となる。

1918年（24歳） 《洛北修学院村》（滋賀県立美術館蔵）

1920年（26歳） 《京の舞妓》（東京国立博物館蔵）

1921年（27歳） 吉田弥と結婚。目黒に住む。

1923年（29歳） 武蔵野平林寺に仮寓。年末に平林寺近くに画室を移す。

1925年（31歳） 年末に目黒に画室を移す。

1926年（32歳） 第1回個展開催

1927年（33歳） 《京の家・奈良の家》（東京国立近代美術館蔵）

1930年（36歳） ローマ日本美術展覧会に随行して渡欧。欧州旅行。

1931年（37歳） 第2回個展開催

1932年（38歳） 《花の傍》（株式会社歌舞伎座蔵）

1933年（39歳） 朝鮮美術展覧会の審査のため渡鮮。朝鮮旅行。

1934年（40歳） 《白日夢》（敦井美術館蔵）

1935年3月20日、腸チフスに罹り没。

1章 2章 3章 4章



《洛北修学院村》
1918年
滋賀県立美術館蔵

1章 主観で「真実」にせまる

安雅堂画塾での粉本学習で基礎を学んだ御舟にとって、塾の先輩であった今村紫紅は大きな存在でした。「自由も、新もわれにあり」「芸術の制作に気兼ねは無用」*と主張する紫紅を中心に、御舟と仲間たちはほどなく赤曜会を結成し研鑽を積むことになります。御舟が紫紅の言うままに実景写生に取り組んだのは「真実」を知るため。そして紫紅といっしょに東西の古典絵画、とりわけ南画を研究したのは主観表現を学ぶため。この時期の御舟の作品には、紫紅からの強い影響のもと、色やかたち、筆触が躍ります。

＊今村紫紅「暢気に描け」『多都美』8巻3号、1914年2月



《隠岐の海》1914年
広島県立美術館蔵

先輩の跡を追え

第1回赤曜会展の出品作。今村紫紅の《近江八景》(1912年、東京国立博物館蔵、重要文化財) 等の構図にならって、海、浜、村を縦長の画面の下から上へ積み上げるように描く。

特集 | 赤曜会

御舟が入門した安雅堂画塾の筆頭であった今村紫紅(1880-1916)を中心に、1914年に同門の8名で結成した研究会。紫紅のもとで、日中は戸外スケッチ、夜は古画、とくに南画の研究に励み、天幕張りの展覧会を3回開催した。この小特集では赤曜会の仲間たちの当時の作品と資料を紹介し若き御舟を俯瞰する。



今村紫紅
《春さき》1915年
東京国立近代美術館蔵

2章 写実で「真実」にせまる

御舟は写実に向かった当時の心情について、「詩のやうなものを通して見た自然観察」*ではなく、「もつと厳密に、もつと忠実に、ものを見なければいけないと思ひ出した」**と回想しています。なぜそう思ったか。彼が16世紀ドイツの肖像画家ハンス・ホルバインの画集を所持していたこと、ロシアのディミトリー・メレシュコフスキーが著した『先駆者』を読み、レオナルド・ダ・ヴィンチの真実追求に感銘を受けたことは、数ある伏線のひとつとみなせるかもしれません。《京の舞妓》によってそれまでの日本画の常識を覆した御舟が、その後、どのように写実表現を展開していったかを、風景とそれ以外に分けてご紹介します。

＊「日本美術院と青年作家」『美之國』9巻9号、1933年9月　＊＊「あの頃の話〈京都時代〉」『美術評論』3巻2号、1934年3月



《京の舞妓》1920年　東京国立博物館蔵　Image: TNM Image Archives

御舟の斬新が凝縮

デッサンに狂いはあるが、ヌッと迫ってくる異様な存在感がある。畳の目、着物の布目をいちいち描くどころか、顔にまで無数の線により陰をほどこす。発表するや「悪写実」との酷評を受けた。

《京の舞妓》
~~3/19~~ → ~~4/11~~
展示期間

資料で読み直す

御舟が写実描写に執着し表現を模索し続けたのはなぜか。信頼する友人の存在が注目される。
友人とは原三溪の長男で実業家の原善一郎(1892-1937)。原は《京の舞妓》に取り組む御舟に宛て、日本画にかつてない努力の作に期待する旨を書き送っている。そして作品の発表後には別の友人に宛て、院展のなかでは《京の舞妓》が一番よいが欠点も多いといい、細密描写と日本画について今度コメントすると記す。
古今東西の美術に通じた原が御舟へ送ったアドバイスとは？ 御舟がにわかに琳派や宋元画を研究しはじめたことに関係しているのではないか。

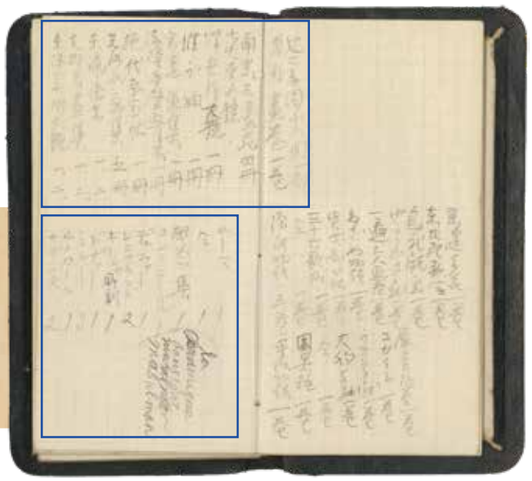




《渓泉二図》1921年　東京国立近代美術館蔵

すべては点と線からできている

全体に針先のような細い平行線を交差させ、針孔のような細かい点を無数に打つ。左右で画面はつながらず、左右で構図の呼応もない。その効果とは？



資料で読み直す

ある時期における御舟の蔵書。『宗達画集』『光琳派画集』『支那名画集1·2』『東洋美術大観1·2』等の他、西洋絵画の蔵書も数多い。
（御舟が座右においた図版や写真も紹介予定）



《闘蟲図（とうちゅうず）》1926年　二階堂美術館蔵

元ネタは中国絵画

中国・明時代の草虫図に描き込まれたカマキリの図が発想源と指摘されている。捕らわれたセミの羽のふるえが画面に音を響かせるかのよう。



《渓泉二図》（右図）拡大図

3章 構成で「真実」にせまる

簡略化や平面化。この時期の御舟に見られるこうした特徴は、琳派などの古典絵画との関連で語られがちです。果たしてそれだけでしょうか。御舟は日記に、「吾等は若いのだ　髭を生やして紋付で床間に納まっている日本画家の老成ぶりを排撃すべし 血潮は赤いのだ」*と綴っています。彼が見据えていたのは巨匠然とした日本画家には思いもつかないような斬新な表現であり、古典絵画の平面性はその足がかりのひとつに過ぎませんでした。実際に、当時の批評家たちは御舟の新たな試みを構成主義と結びつけて論じ、後に日本画の前衛を担うことになる若者たちがこの頃から御舟を訪ねて来るようになります。

*日記 1932年7月22日





《京の家・奈良の家》1927年　東京国立近代美術館蔵

描かれているのは立体なのか？

地面が省かれているせいか、「京の家」(右) の黄色い家はだいぶ歪んでいるのにそれに気づく人は少ない。「奈良の家」(左) の手前にあるらしい手押し車は壁の落書きのようにも見える。

資料で読み直す

ヨーロッパ行きがなければ御舟が人物像に取り組むことはなかったかもしれない。ローマ日本美術展に随行した御舟はそのままヨーロッパを巡遊し、多くの作品を見て多くの写真を持ち帰った。残っている写真は300点ほどで、ほとんどが人物像や群像である。
(会場モニターにてスライドショーで全点紹介予定)



上段左から：《跪くアプロディーテー》ローマ国立博物館／マソリーノ《洗礼者ヨハネがヘロデとヘロディアを叱責する場面》1435年、ヴァレーゼ、カスティリオーネ・オローナ洗礼堂／マソリーノ《ヘロデの宴》(部分) 1435年頃、ヴァレーゼ、カスティリオーネ・オローナ洗礼堂
下段左から：レオナルド・ダ・ヴィンチ《座る人物の衣紋の習作》1475–1485年頃、フィレンツェ、ウフィツィ美術館／エル・グレコ《十字架のキリスト》東京、国立西洋美術館／《ヌビアの弓兵たち》紀元前15世紀頃、デル・エル・バハリ、ハトシェプスト女王葬祭殿 (すべて現在の所蔵先)



《マルケンの村娘》1931年





《女二題》1931年　福島県立美術館蔵

4章 想念で「真実」にせまる

例えばここに桃があるとします。20代の頃の御舟なら桃のうぶ毛まで描いたかもしれません。その御舟がこの時期には「どうしても一ツの美しい肉体だといったもの」*を桃に感じてそれを表現したいと願うようになります。色に関しても「自然そのまゝの色ではない絵画の持つところの特殊な色であらねばならない」**と綴ります。見ることの重要性をくり返し再認識する一方で、見えるものの束縛から逃れようともがく。その逡巡のさなかに、御舟は《白日夢》を描くに至ります。空想から生まれ、ものを見ないで描いた《白日夢》は不安なほどに美しい見た目とは裏腹に、きわめて斬新かつ野心的な作品でした。

*日記 1934年1月9日　**日記 1932年5月28日



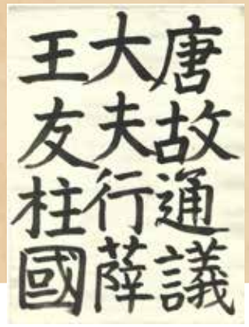
《白日夢》
1934年
敦井美術館蔵

資料で読み直す

《秋茄子》の茎には運筆が感じられる。仮想の筆の動きに誘われ、私たちの視線は浮いたり沈んだりしながらなでるように表面を這う。御舟は1933年以降、唐時代の顔真卿の書を研究していた。



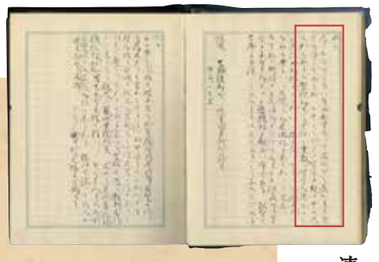
《秋茄子》1934年



顔氏家廟碑臨写
1934年

資料で読み直す

「白日夢といった感じを表徴にあつかって見度い　当今私の頭の裡にあたまをもたげてゐるものは花なり草なり木なりをもっと感情的に観度い事である　視野の世界に安住してゐたことにはあきあきして来たのである」(日記、2月5日)
「表現法に飛躍を試みるのが今度の根本問題だ　思ひ切って視野の世界から想念の世界に飛び込んで見度いのだ」(日記、2月8日)



速水御舟日記　1934年

音声ガイドは、俳優・中島歩さん！

速水御舟さんのことは知りませんでしたが、「京の家・奈良の家」を一目見てその静けさや空気にうっとりと浸ってしまいました。是非皆さまにご紹介したいと思います。



中島歩

1988年生まれ、宮城県出身。日本大学藝術学部在学中からモデルとして活動を始める。2013年、美輪明宏演出・主演の舞台『黒蜥蜴』で俳優デビュー。
2014年、NHK連続テレビ小説『花子とアン』でテレビドラマ初レギュラー出演。その後も数々のドラマ、映画に出演。
近作に映画『ナミビアの砂漠』、『ルノワール』、『男ともだち』、ドラマ『あんぱん』、『豊臣兄弟！』、『Tシャツが乾くまで』など。



1915（大正4）年
赤曜会メンバー。右から3番目が御舟。

「悪」グッズの展開に乞うご期待！

若き御舟が参加した赤曜会は、新しい絵画を追求した若い画家たちの集まりでした。トルコ帽と黒マントに「悪」のバッジを胸につけ銀座を闊歩したという逸話が残ります。
本展では、「悪」バッジを再現したグッズの製作を準備中。他にもオリジナルグッズを多数ご用意します。ご期待ください。

《蝶に戯れる猫》
1934年
公益財団法人二階堂美術館蔵





オリジナルマスコット
キーチェーン
※画像はイメージです。実際の商品とは異なる場合がございます。



開催概要

展覧会名

斬新！ 速水御舟

会場

東京国立近代美術館 1階企画展ギャラリー

会期

2027年3月19日（金）〜5月9日（日）

休館日

月曜日（ただし、3月22日、3月29日、5月3日は開館）、3月23日、5月6日

開館時間

10:00〜17:00（金曜・土曜は10:00〜20:00）

主催

東京国立近代美術館、毎日新聞社、日本経済新聞社

協力

ビクセン

展覧会公式サイト

https://art.nikkei.com/gyoshu2027/

展覧会公式X

@gyoshu2027

お問い合わせ

050-5541-8600（ハローダイヤル）

※会期中、一部作品の展示替えを行います。開催情報は変更になる場合があります。

問い合わせ先

「斬新！ 速水御舟」展広報事務局（共同PR内） 担当：三井

TEL

03-6264-2382（土曜・日曜・祝日を除く平日のみ10時〜16時）

E-mail

gyoshu2027-pr@kyodo-pr.co.jp

同時期に開催予定

展覧会名…「開館60周年記念特別展 速水御舟」 会場…山種美術館 会期…2027年3月20日〜5月16日



《赤絵の鉢にトマト》
1921年